

わくわく ジュラクグループの楽しいイベント

創業期のメニューを現代風にアレンジ!

100周年記念メニュー

1924(大正13)年3月関東大震災の爪痕残る東京神田須田町に「須田町食堂」のノレンを掲げたのが聚楽の始まり。当時は西洋料理と言えば庶民にとって高嶺の花でしたが、須田町食堂へ行けばどこよりも安く気軽に食べられると市民の間でたちまち話題に。大正昭和のレトロおしゃれな洋食が楽しめる新メニューの提供を開始します。



創業時の
お気軽ランチ



じゅらくの8銭
合い盛り丼

じゅらくの10銭
ビーフカツレツ

店舗情報

- ・レストランじゅらく 上野駅前店
- ・浅草聚楽
- ・須田町食堂秋葉原 UDX 店にて提供中 (2024年3月まで)

じゅらく 聚楽でしか買えない オリジナルグッズ

聚楽系列各ホテルでは「聚楽オリジナルグッズ」を販売中。トートバッグやマッチ箱型付箋など他では買えない聚楽グッズをご宿泊の思い出に是非いかがでしょうか。



店舗情報

- ・飯坂ホテルジュラク ・みなかみホテルジュラク ・万座ホテルジュラク
- ・伊東ホテルジュラク ・神戸ホテルジュラクにて販売中

※掲載情報は2023年8月31日(木)現在の情報になります。※イベントは予告なく変更または中止となる場合がございます。※写真は全てイメージです。

編集後記

始まりは『須田町食堂』。その原点を調べてみると驚きの事実が次々と見えてきた。創業者加藤清二郎は料理人ではない。飲食に興味があったわけでもない。会社勤め時代の到来とその要求に気付き、考え、歩き、修行をし、満を持して簡易洋食のノレンを掲げたのだ。奇しくも関東大震災はその転機となってしまったが、帝都復興の一役を担った事も事実であろう。そして特筆すべきは開業前に記された従業員の処遇法。仕事は厳しくも人には優しく、全ては「思いやり」の精神だったのです。その後の発展は…次号に続きます。

参考文献

- ・赤手空拳 市井奮闘傳 実業之日本社 (1931年 1月)
- ・我等の誇り ダイアモンド社 (1934年10月)
- ・現代人物伝シリーズ1 銀河出版 (1963年 3月)
- ・聚楽50年のあゆみ



2024年3月10日 株式会社聚楽は
100周年を迎えます。

Hotel Juraku

こころ感じるジュラクの旅

ことは

vol.20



日本の食堂王 と呼ばれた男

綿密な計画と独自の商法
創業編

ことは vol.20 | 2023年8月発行 発行元：株式会社聚楽(じゅらく) 広報部
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-4 龍名館本店ビル9F TEL 03-3251-7507

じゅうく
株式会社 聚楽
創業者 加藤 清二郎
(1898年4月8日～1982年9月24日)

【幼年期】

●1898 (M31) 年4月8日

新潟白根町(現:新潟県新潟市南区)に生まれる。

●1903 (M36) 年

5歳にしてバクチを覚える。(後に人生を左右することとなる)
景気のいいおじさんの横に座るとこずかいをくれるので、
それを元金としていた。



●1913 (T2) 年

学年では常にトップの成績で高等小学校を卒業。
先生、両親に進学を進められるも雑誌で読んだ安田銀行創始者・安田善次郎氏の
言葉「実業界で大いに成功しようと思ったら学識より経験、理論より実地」これ
を無条件に肯定し進学をきっぱり断る。
新潟市の海鮮問屋へ見習奉公へ出る。

●1915 (T4) 年

兄・清一郎の影響もあり新
潟村松歩兵第30連隊へ
志願入隊。



●1917 (T6) 年

伍長勤務上等兵で除隊。

写真一番左:成績は連隊約
700名の中で年少にもか
かわらず常にトップ。



【波乱万丈青年期】

第1次世界大戦による 戦争特需により日本は 未曾有の好景気となる

数年なりを潜めていたバクチ魂に火がついてしまった。
母から借りた3百円を元手に相場の世界へのめりこんでいく。
強気の1点買いでまたたく間に10倍になり商売が馬鹿々々しくなる。
持って生まれた勘と度胸、当時の金で10万円ほど儲けた。
令和の価値に換算すると2億円は下らない。
母に借りた3百円は10倍にして返している。



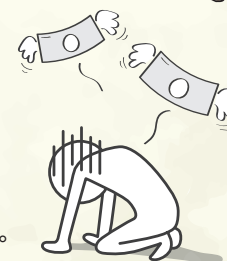
【当時の川柳】

大根を
売って百姓
カブを買ひ



●1920 (T9) 年3月

株価大暴落。10万円どころか1万円の借金を背負い込む。



●同年「樺太は成金景気で雪が解けた」との噂を聞き サガレン(樺太)へ

戦争景気に付け入ることはで
きなかったが現地で鉄道建設
に従事。
半年間で5百円を
手にする。



●1921 (T10) 年

帰郷後再び相場に手を出し、5百円を失う
「相場になんか手を出すものではない」



【人生の 転換期】

●1922 (T11) 年4月11日

上京。堅実な実業に精進すると決心する。

1 時代が要求しておりそれを充たす施設がないこと

2 実生活に関係深く発展の可能性あるもの

3 社会奉仕と自己営利とが両立するもの

この3つの要件を兼ね備えた事業を発見するには地理と商業事情を知る必要があると考え菓子問屋の配達係として住み込む。のちに抜擢されて外商係となる。

8か月後、自らの経験により着眼したのが「民衆食堂」だった。



大正時代の万世橋駅
後に写真手前の土地を借りることとなる



💡 安くて美味しいこと

縄のれん、いわゆる「一膳めしや」がこれに該当するが、見た目や清潔感に難あり。

💡 誰でも気軽に入りやすいこと

洋服階級が増えてきたが彼らは「めし屋」に入ることを良しとしない風潮があった。洋服を着ている手前、こうした非衛生的な店へ入ることを恥じていたのです。ちょっとした洋食店はかなりあったのだが1品5.60銭も取られ、チップも取られる。月給25円の会社員が1食1円を覚悟せねばならないのだ。

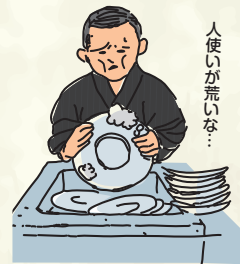
洋服の会社員も学生もご婦人も、半纏姿の作業員にも威圧的にならぬよう、明るくて清潔でさらに二十銭以内で腹一杯になる美味しいものを販売しチップは絶対に受けぬという方針で新しい大衆食堂を作れば市民は絶対喜ぶに違いない。その結果は大繁盛。そうだ!きっと成功する!

更に研究を進めてみると東京は急速に都会化しており、人口も増えてきている。市民の生活が都会化するに従って外食をする機会も増えてくる。アメリカ式のチェーン展開で発展の可能性も十分にある。と結論付けた。

●1923 (T12) 年 浅草の洋食屋「三友軒」で皿洗いとして働く。



戦前の浅草



人使いが荒いな...

朝8時から23時閉店。片付け、入浴。その日気づいたことを入念にノートへ書き込む。寝るのは2時3時。軍隊と鉄道建設で鍛え上げられた身体も寝不足には耐えられなかった。3か月辛抱したが神経症に陥りやむなく店を離れた。

●1923 (T12) 年5月

2か月の静養後、2度目の樺太へ。

●1923 (T12) 年9月1日

関東大震災発生

その一報は樺太にも飛んできた。手紙で東京在住の親類からバラックで飲食店が繁盛している情報を得る。「帝都復興に安くて気軽に入れる食堂は絶対に必要だ」。

「行こう! 東京へ!」



ロシア人家族と

【大衆食堂の必要性を確信！ 1日も早く開業すべし！】

●1923 (T12) 年11月14日

樺太で蓄えた3百円を手に入京、上野西郷像の前で焼け野原を目の当たりにする。

すでに東京にいた叔父を頼り、そこを拠点として2週間歩き回る。

「震災前の民衆食堂が今なお必要なのか？」
結果は、より一層その可能性を大きくする。

民衆が望んでいると確信することはできたが資金が少額すぎた為、上京していた兄にも援助を頼み、故郷新潟にいる父のもとへ急行する。



震災直後の上野・西郷像

頑固な父は度重なる相場の失敗を言いだしなかなか金を貸してくれない。
それでも口説きに口説き、兄の口添えもあってついに了承してくれた。

父から材木代3千円、友人親戚3人から借入8百円、自己資金3百円、合計4千百円の元金を手にすると、すぐさま東京へ引き返した。

次は場所の選定。東京市内を2週間歩き続け目に留まったのが神田須田町交差点の近く。

人、車、馬の往来激しく、鉄道と市電も通っており、近くには神田青物市場もある。

ちょうどそこに10坪ばかりの空き地を見つけたのだ。



関東大震災後の万世橋駅



現在は商用施設として利用されておりホームも見学することができる



明治後期の神田青物市場

地主を調べてみると近くにある神田青物市場の組合長で民衆からも評判の良い村木喜助氏が所有する土蔵の焼け跡だということが判明、早速交渉したが相手にされない。

二度三度足を運んだ。先方は面会さえしてくれない。
十数度目に訪問した時主人は留守だと言われた。

「ではお帰りになるまで待たせて頂きます」村木氏はやむなく会ってくれた。
「私の大衆食堂は民衆のために必要です。必ず成功するという確信があります。後輩を指導する気持ちでお貸しくしませんか。私が事業を始めるも始めないも、男になるものならないも、あなたのお返事一つにあります。」

それでも村木氏は応じない。土地を貸すと借地権の問題が厄介だからだ。
「材木はただで貰えます。建築費も私が負担します。出来上がった建物は無料で差し上げます。即ち、あなた様所有の建物で登記してください。私はその物件を借りることにします。ただ初めてする仕事ですから家賃は安くしてください。」
耳を傾けていた村木氏は無名な青年の不敵な面魂（つらだましい）の中にピーンと打たれる気迫を感じた。

『お前さん、年は若いが面白そうな人だな、しっかりやってみなせえ！』

土地が決まると父に報告、建築のことは兄誠一郎に一切を任せる。



【加藤清二郎の覚悟】

大正十三年元日朝六時三十分

有史以来未曾有の大天災の為め破壊されたあらゆるものを

建設復興すべき年が来た。

己れにも新興第一年の春が来た。

真に意義ある生活に入るべき、希望に輝く年が来たのだ。

使用人の待遇法に就て(一部抜粋)

おおよそ
凡そ凡ての事業は一人で出来るものではない。
その
其事業が大なれば大なるほど、多くの人を要するものである。

- コックなどを雇ふ場合には、コック達の持つ共通せる点などに就ても良く研究して、上手に使わねばならん。
- 病気になったり、^{その}他店員に悩みがある場合には、心から親切に慰めてやり、又悩みから救ってやらねばならん。
- 良く店員の境遇と心事を理解し、同情心と温い親の心持とを以って使わねばならん。
- 主人の奮闘振り如何は其店の発展に重大なる関係があるのである。
自らすべての点において活模範を示さねばならん。
- 商売の事を教へる以外に、完全なる人間としての教育もしてやり度い。

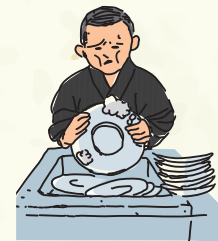
【開業直前の皿洗い】

●1924 (T13) 年1月

重労働で体調を崩した浅草「三友軒」へ再び皿洗いとして舞い戻り、住み込む。

資金を調達し、土地も確保し、建物建設は兄に任せ、最終の準備段階に入った。

過去の研究を補うため、さらには震災後の情勢を知るため、再び辛い労働生活に身を投じたのだ。



ここで重要な人物と出会うことになる。

原田 屯 (はらだ たむろ) 氏

新潟県西蒲原郡赤塚村出身。

同郷でもあり、誠実、勤勉なこの青年を事業立ち上げメンバーに引き込むことに成功する。



向かって右、白衣姿が原田氏
左は(おそらく)創業者加藤清二郎
この写真は1925(大正15)年2月28日須田町食堂2号店
日本橋営業所開店の時のもので社内に現存する最古の
現物写真



1929年撮影

大衆食堂で一番重要な料理と仕入を原田氏に任せ、自身は安心して経営に注力することができたのだ。

原田氏の加入はのちの須田町食堂発展に大きく寄与することとなる。

すだちょう 【須田町食堂開店】

●1924（大正13）年3月10日午後3時

ささやかな出発であったが、“帝都”の中心に生まれたこの小さな大衆食堂は、たちまち市民の話題となった。

当時“西洋料理”と言えば、庶民にとって高嶺の花。その洋食が、どこよりも安く3銭、5銭、8銭均一……須田町食堂へゆけば、気軽にハイカラなカツレツやカレーが食べられるというわけである。

お客様がせまい店内に立て混んで、それこそ戦場のような騒ぎでした。「お帳場さん」とか呼ばれた私は風呂屋の番台のようなところにきちんと座ってお金のやり取りをしていたわけですから、一息ついて立ち上がろうとしても足がしびれて動けない。

社長は“旦那さん”と呼ばれていましたが鉢巻きを締めてキビキビと動き回り一人何役もこなすという活躍ぶりでした。

原田ツネ：原田屯（たむろ）氏の妹

- | | |
|-----------|------------|
| ①店主・加藤清二郎 | ②店主の母コマ |
| ③店主の兄清一郎 | ④原田屯（たむろ） |
| ⑤原田の妹ツネ | ⑥渋谷 |
| ⑦氏名不詳 | ⑧重川得三郎 |
| ⑨島田 | ⑩副店主・伊藤啓三郎 |
- 後列左から3人と右端の1人は同郷新潟より上京した大工さん。その他は氏名不詳



客席数25。この日6時間の営業で78円68銭の売り上げがあった。